

2E-19

特16

~~46~~  
56

766  
248  
309

說 臨  
教 時  
講

錄

全  
一

013996-000-9

特16-56

講錄(臨時說教)

金光 大陣 / 著

M28

ABB-0248



編述の主意

世道人心の先導に重任を擔へる教職講師たる者此

際は教導上最も注意を要し一意専念宣教すべきの

秋の依て急よ此講録を編述し講師一般へ頒ち吾

本部遺教の針の大体を示す事とはなかつ然る日

夜繁忙の折柄取急ぎ印刷に付せしものなれハ前後

複雑出誤植等も多からむ今ハ只一片の赤誠よりか

くはなすのみ夫れ之を諒せよ



明治廿七年七月廿八日

神道金光教會長 金光 大陣



一神國の人<sup>ひと</sup>に生<sup>うま</sup>れて神<sup>かみ</sup>と皇<sup>かみ</sup>上<sup>み</sup>との大<sup>だい</sup>恩<sup>おん</sup>と知<sup>し</sup>らぬ事<sup>こと</sup>

たゞ今朗讀いたしましたは何れも御承知の通り吾  
教祖の神誠第一條であります右一條を講題と志  
て聊皇國の御爲よ臨時急務の教導とする積である  
から聴衆の方々と御心づかに御さく取ありたき  
事である

て神國乃人に生れて神と皇上と大恩とを示さ  
れまゝたは斯大日本といふ國は神様の御國である  
夫れは如何いふわけかといへば此御國を始めとし  
て世界を御鑿造遊されたる其高き尊き神々様の御  
本國にて即ち世界の祖國たれば八百萬の神等も此  
大御國を大宮所と御定まして世を所知看させ給へ  
ハかくハ申しけるかり又  
皇<sup>み</sup>上<sup>み</sup>とは一天萬乘にわたらせ給ふ天皇陛下の御事



を申し奉るのである

抑も吾國の天皇陛下ハ諸外國の大統領や國王など

いふ者とは天と地との相違がありません夫は神代の

太古天祖天照大御神の神勅を以て天下統御大君と

御定めまゝして皇孫邇々藝命を千五百秋瑞穂國即ち

此日本帝國に御降臨坐しより以來皇統連綿と天

と一すぢの糸を引はれたる如く天津日嗣の高御

座動きなく千代に八千代よ小石のいはほとなりて

苔の生す迄など稱へ奉れる如く天壤無究萬世一系

よおはしまして實に外國の帝王の如く今日ありて

明日あき淺間しき國体の帝王とハ月ツキトカニの差サカヒがある

のであります故に

吾大君の民を親臨給ふこと眞の赤子の如く民は大

君を仰ぐこと眞の親の如くにして早く云ば天皇

陛下は日本國人民の大父母様よして吾々人民は眞

の臣や子である此親子の神縁によりて幾千年の昔



此吾人先祖よりして今明治の吾人に至るまで御大  
 恩を蒙りつゝ御互の身に及で来て居るわけである  
 ろここで此神恩此皇恩は人といふもの國と云ふもの  
 と始めより蒙りつゝ戴きつ今日に至る事なれば實よ  
 大恩である斯神皇の二大恩を知らざれば此赤心が  
 あらざれば斯結構なる神國斯難有万世一系の天  
 皇様の知食す朝日輝く日本に生れて居とも此國の  
 人の本分が欠たる者と云ねばならぬ否此神皇の二

大恩を知ざるときは日本の人とは云へない代で在  
 る其で吾人ハ此神恩皇恩の万分の一に報奉らむ心  
 と以て平穩無事の御代にハ身体健固である時は天  
 地の神明を敬ひ信じまつりつゝ各其家職家業を勵  
 み働いて斯國を富く國力を強く大君様の大御心を安  
 じ奉り若一旦緩急あるに日は義勇公に奉じ身とも  
 心とも只管大君の御爲め國の御爲め盡さねばな  
 らぬ譯であるとの吾教祖の御教であります然ると



ころ今や皆御承知の通り吾日本國と恰も憐れ當る  
 朝鮮國に去る五月の始めころより東學黨とや以ふ  
 者が起て彼の國內を大變騒動せしむれば彼の國へは  
 吾國よりも數多の人民が行て住居して商業を營み  
 居ります故に其人民御保護の爲め去る六月來  
 畏も天皇陛下の大命の隨々吾陸海軍の軍人は彼  
 國へ日に夜と繼で派遣致されまゝた定めて聽衆の  
 中には其子や兄弟等が行て居らるゝ方々もありま

るようが遂に此頃の新聞にて見受まする皆御承知  
 もあらむ早朝鮮國の豊島といふ島の近傍に於て清  
 國軍艦より吾日本の軍艦へ向てみだりに發砲せし  
 むば吾軍艦は直ちに是れを應じて戦ひました然る  
 ところ愉なるかな快あるかな忠愛一片に堅め立た  
 る鉄石の如き大和魂を籠めたる吾日本帝國軍隊ハ  
 第一着早々より大勝利を得たる由であります此上  
 は如何なり行くかハ今より豫め知る譯は参りま



せぬと雖も抑々吾國が外國に對しては昔より一寸  
 だも敗を取たる事のなきは皆御承知もあらむ昔  
 神功皇后様か神軍を起して三韓今の朝鮮を征伐あ  
 そばされ又た加藤清正公が彼國を討ち平げ亦弘安  
 四年の頃蒙古と云健き國より吾九州沖に數万の大  
 船を寄せ來て數百萬の兵隊を以て日本を一夜の間  
 に併呑せむとせし事もありしが當時には一夜の間  
 に神風吹起りて彼賊兵を鏖殺し生て歸る者僅に

三人とや云ふ又近くは明治七年四月に彼の臺灣と  
 いふ世俗鬼國とも云ふ所の荒き賊徒を吾軍人ハ  
 戦の下に討平げたる事の例もあり況や今回の勢に  
 於ては決して彼の國々に一寸だも敗を取る様の氣  
 遣は万々ないと信じますいでやいで四千萬の同胞  
 兄弟は男となく女となく擧て帝國の軍人たるの氣  
 象を奮起せねばならぬ今此時機が神國の神孫たる  
 大日本帝國の國權を大和丈夫の武威とを海外に



輝すの愈々大時機で在る此精神此壯快なる決心を以て吾々同胞たる軍人諸氏は一天萬乘の大命を奉じ余念なく此日本國の親や妻子を残し置きて異國の地理も不案内なる國へ渡り往きて唯君の御爲國の御爲と吾々が國と家とを代りて野に山と海と陣取りをなして心をも身をも擧て大日本帝國の光りを輝さむと日夜寢食を忘れて盡せる吾同胞たる武士が其心の程を想像し酌取らねばなりませぬ事

である爰に言の葉に擧ぐるも恐ながら吾天皇陛下よりハ在韓兵士へ度々慰問として御惠の御物を下さり賜ふ事は皆々日に新聞に且は傳聞に何れも御了知ならむ實に陛下の吾軍人を愛せられ惠せらるゝ此聖恩の高きと浴する軍人等は彼の國にありて如何に難有思ひならむ又遙に洩れ承れば今回の事變に係る電報は如何に深夜たりとも一々御覽せらるゝと聞きぬ斯くも大御心を煩らばせら



るゝと承るも恐多き事である又吾教祖の遺訓も吾  
 身は吾身ならず皆神と君とのものと思へよと教お  
 かれしも常々吾人ハこの赤誠ありて國家かゝる場  
 合は身を心をも大君様と捧げ奉りて皇國の御爲  
 につくせよとのことであるぞや

嗚呼滿場の聽衆の各方よ如斯説き去り如斯教へ來  
 れば如何ある憾慨を抱かれしか如何なる思を惹起  
 されしか實に斯機に當ては平素は或政黨の主義の

變るより互に相争ひ或は己が奉ずる所の信仰の道  
 の異なるよりして心よく席を相同ふせざりし人々も  
 今日私心を去り公義ととり唯萬世一系の 大君  
 と日本帝國とより外に心を留す唯た忠と愛とより  
 外に思ふ心なくして同心協力を以て此の大地も裂  
 け鉄も湧くといふ此炎天の眞中に彼の國に於て銃  
 を採り劍を振ひ居る吾人同胞の軍人諸氏が爲にハ  
 斯國に居残り留まれる吾々は互に心盡して在韓軍



人代艱難の万分の一だに慰め問はむことを圖では  
 なりますまい各々如何御考なさるか而して人の力  
 の及ばぬ人の心の届かぬ所をば眞心こめて天地神  
 明へ祈願申上げねばふりませぬ夫故に吾本部より  
 は已に吾々の所を在韓軍人の身体健康の祈願を一  
 生を籠めて執行せよと達せられた元より御達  
 なくとも事變起りし以來は日夜祈願しつゝありし  
 が爾來彌々心の限り祈念致居次第で在ります扱て

已に彼國へ出陣して居る兵士の家の内に残れる家  
 族老幼の内よハ今回出陣して在る其人の爲めに日  
 々と一のき居りし人もありしならむ是等の人々を  
 保護致度もので在る尤も是等は其筋より何とか出  
 來うるものでハありまじようが其筋の御沙汰を待  
 ずとも心に懸て世話せねばならぬ事であることに  
 一步を轉じて特々注意いたしおきたき事かありま  
 す目下我國に居留する支那人に對するに決して粗



暴の仕打をしてはありませぬ今我國に居留する支那人は怨あることではありませぬ然れども稍もすれば坊主が憎ければ加害まで悪と云ふことがありますが決して左様な小人輩の心を持ってはありませぬ此際は一層彼等には心を用ゐる方日本帝國の特性たる道徳を彼等に知らせる時で在ると考ます併しおがら此注意は此席にお出る様お各々方へハ無用の言なれども本職が老婆心であるから其心して

(此特別注意ハ山間ノ地方ニシテ支那人居留セザル地方へハ無用ノ言也)

扱て終りに臨むで一言念の爲申おきたきハ目下時も炎暑にして吾國の内よも所々に流行病もある事なれば互に衛生を守り衛生を重むじ厚く信心して身体を堅固にして内を堅く守りつゝ流行症などに御互に罹らぬ様にして陸海軍々人一同凱戦歌擧て勇しく一日も早く歸國せらるゝの時を西天を仰で待受け度事であります



明治廿七年七月廿九日印刷  
全 年八月二日出版  
明治廿八年一月三十日印刷  
全 年二月五日再版

\*\*\*  
非賣品  
\*\*\*

編者 兼中教正 金光陣

岡山縣備中國邊口郡吉備村  
大字大谷七十三番邸住

印刷者 西尾大吉

岡山市大字平野町卅四番邸

印刷所

西尾活版所  
岡山市榮町八番邸



